

大博物館だまの

No.50

2006.4

津山郷土博物館



「津山景観図屏風」右隻(部分) 鍛形蕙斎筆 個人蔵

「津山景観図屏風」右隻には、津山城下の秋の様子が描かれており、鍛冶場橋(今津屋橋)の上には、年貢を納めに来たのか、俵を積んだ牛を引いて城下を目指す人の姿も見えている。また、画面中央には津山城を描き、城山の周囲には町家が軒を連ねている。この画面を一望できる場所はないが、複数の視点をうまくまとめており、統一的な視点としては吉井川南岸の神南備山あたりが想定できる。

この屏風を描いた鍛方蕙斎は宝暦十一年(1761)もしくは明和元年(1764)に江戸で生まれ、浮世絵師北尾重政に入門し、「北尾政美」の名で活躍した。寛政六年(1794)津山藩御用絵師に取り立てられ、後に「鍛形蕙斎」と名を改めた。文政七年(1824)没。津山藩御用絵師鍛形家は養子となった赤子(せきし)が継いだ。

吉井川の外輪船

「津山景観図屏風」は右隻に紅葉が美しい秋の津山城下を、左隻には桜咲く春の二宮を中心とした風景を津山藩御用絵師鋤方蕙齋が描いたもので、文化七年(1810)五月から翌年三月頃の様子が描かれていると考えられる。その理由として、御用絵師としての蕙齋の活動の場は主に江戸で、津山にはわずか上記10ヶ月ほどしか滞在しておらず、その上、この屏風に描かれた津山城下の風景は、津山城の天守や、吉井川沿いの川戸御蔵など、実際の景色を見た者以外には描けないほど現実に即しているということが挙げられる。

そのような「津山景観図屏風」右隻には城下を東西に流れる吉井川の情景が描かれており、その川面には高瀬舟や帆掛け舟などが浮かんでいる。その中に混じって、船の上に小屋をかけ、側面に車輪のようなものが付いている、まるで、幕末に登場した外輪船(蒸気船)のような船が描かれている(図1)。



(図1)

そこで、改めてこの屏風に描かれた「外輪船」を見ると、同様に側面に車輪がある船は計4艘あり、これら4艘とも、岸に近いところにあることに気が付く。4艘のうち何艘かが岸近くにあったのなら、何か事情があって接岸されていたと

も考えられるが、すべてとなると、これらは川岸近くにいる必要があったのではないかと考えられる。つまり、これらは川を行き来するのではなく、岸近くに停泊している姿が普段の状態だったのであろう。

そのようなことを踏まえて、他の資料を見ると津山藩町奉行日記の寛政八年(1796)に次のような記事があった。

「一 茅屋町西米屋伝吉なたか瀬におみて水車船仕度願先日御内意済候二付差出候様申付置候処差出今日右絵図を添御用番江差出候処大目附へ相渡置御聞届申達候」(四月廿八日条)

茅屋町とは茅町のこと、貞享年間(1684～)以前の古称である。茅町に住んでいた西米屋伝吉という人物が出した、「なたか瀬」というところで、「水車船」を行いたいという願いに対して、その許可が出たという内容の記事である。この「なたか瀬」という場所は不明であるが、町奉行日記に出てくる地名であることから、その場所は城下町内に限定される。また、津山城下で名前の付いた「瀬」があるほどの大きな流れは吉井川以外にはありえない。すなわち、「なたか瀬」は吉井川流域にあったと考えられる。

資料中の「水車船」とは、水車を船に搭載した、船水車・船車のことと思われる。その起源は古く、西洋では6世紀頃には使用されていたらしい。日本でも明治になると、東日本を中心によく利用されていた。その外見は、「津山景観図屏風」に描かれた「外輪船」とよく似ており、したがって、屏風に描かれた船が資料中の水車船であることが推定できる。

また、町奉行日記によると次のような記事がある。

「一 先日与兵衛殿へ御内意申上置候なたか
瀬二而船二而米つき車之義勝手次第願差
出候様ニ…(略)」

(同年同月十三日条)

この記事から津山での水車船は「米つき」=精米をするためのものであったことが確認できる。ではなぜ、わざわざ水車を船に仕立てたのであろうか。水車による労働の省力化—労賃の節約を目指すのであれば、水車船を使わずとも、近隣の在分には既に固定式の水車があり、それを利用すれば、良いのではないだろうか。しかし、そうではなく、吉井川に水車船が無ければならない理由を同じく町奉行日記の記録からうかがい知ることができる。

「一 東新町種屋伊助わくなけ尻馬ヶ瀬二而小
船車四柄白仕白米下直ニ商売仕度…
(略)」 (同年八月廿八日条)

「わくなけ」とは多数の杭で囲って、その中に石などを投げ込んだ水剋ミツハネのことで、河川の流れを安定させるために堤防から突き出した形で設置された。かまぼこ型の「なげ」とともに、吉井川の流れを制御する重要な施設であった。そのわくなげの先端に、水車船を浮かべ、「白米下直ニ商売」=精米された白米を安価に販売するというのである。

津山藩では米の売買は米仲買を通して行われ、直接の買い入れはできない。そこで白米を安く販売するには、精米にかかる費用—労賃や輸送費などを抑えねばならない。しかし、在分にある水車を使用すると、輸送費が余計にかかる。そのため、吉井川の流れを利用して水車を廻せば在分の水車を使わなくて済む。しかし、固定式の水車を設置すると、吉井川では高瀬舟などの河川交通の妨げになる。それを防ぐため、移動可能な水車船を用いたのではないだろうか。

こうして吉井川に浮かぶ外輪船のようなものが水車船であり、その目的は「白米下直ニ商売」

するためであったことを資料から読み取ることができた。それにしても、なぜこの寛政八年に水車船を使ってまで、「白米下直ニ商売」しなければならなかったのか。

この前年の八月に城下町一帯では洪水が起こっている。『美作略史』によると「八月二十九日洪水」「津山市街及比倉敷村水ニ浸サル」とあり、城東地区には船でなければ入ることができないほどであったことが町奉行日記に記されている。この直後から翌年の新米収穫時期まで、米価が高騰しており、米相場は一時蔵米で一石77匁にまでなっていたのである。そのような状況で、米の安値販売を城下町に住む者すべてが望んでいたことは想像に難くない。

さて、ここまで、吉井川における水車船の利用に関する資料を見てきたが、津山以外の地域における水車船の使用状況はどうであっただろうか。

水車船が、日本でよく知られるようになるのは、明治期になって、紡績の動力源として用いられるようになってからである。愛知県の矢作川などがその代表的な例としてあげられる。それ以前、江戸時代に利用された例として、関東を流れる多摩川や荒川では、江戸後期から船水車が利用されていたことが知られている。埼玉県が行った調査では、荒川では18世紀後半にはすでに、主に米や麦の脱穀・製粉の目的で水車船が川の流れに浮かんでおり、数々の紀行文にその様子が描写されていることが報告されている。また、前田清志氏の調査によると、日本で水車船が使用されていた河川は12本にのぼるが、大半は中部地方以東であり、近畿以西では山口県の錦川のみである。

したがって、寛政八年時点での吉井川での水車船の利用は年代的にも古く、西日本では珍しい事例であるといえよう。

(乾 康二)

平成18年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町 奉行 日記 を読む Ⅷ	古 文 書 講 座	飛 鳥 の 古 代 史 Ⅱ	古 代 史 講 座	夏 休 み 子 供 歴 史 教 室 弥 生 土 器 を つ く る	文 化 財 め ぐ り (友 の 会)
平成18 3	特別展 彫無季の芸術 3/18 ちよつむき 4/16						
4							
5		●5/11			●5/20		
6		●6/8		●6/22			
7		●7/13		●7/27	●7/21		
8					●8/11		
9		●9/14		●9/28			●9/16
10	特別展 津山藩狩野派絵師 —狩野洞学— 10/7 かのうとうがく 11/5	●10/12		●10/26			
11		●11/9		●11/23		●11/11	
平成19 1		●1/11		●1/25			
2		●2/8		●2/22			
3		●3/8		●3/15			●3/10

**博物館
入館案内**

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
 - 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
 - 入館料 一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
- ※()は30人以上の団体

博物館だより No.50 平成18年4月1日
編集・発行/津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@tvvt.ne.jp
印刷/ (有)弘文社